

〈五體投地・如太山崩〉考

——拜禮の中國的展開——

一 問題の所在

神佛などの宗教的絶對者に對するとき、人は自らの身體をひれ伏し、敬禮の行爲をなす⁽¹⁾。五體投地は最も一般的な佛教の拜佛法であり、地域や道俗をとわず連綿として行われ續けてきた。中國・日本では、最上の敬禮法としてと同時に懺悔の作法として受容され、さまざまに變化をして現在に至っている。ところが、漢譯佛典の中に「泰(太)山崩れるが如く」と形容される五體投地や、それに類似した大地にひれ伏す禮拜法が記述される。また、これに關連し

〈五體投地・如太山崩〉考

田 中 文 雄

た「自撲」という苦行法がある。この禮拜の方法は現在に傳わっていないが、かなり激しい行爲であつた。

自己毀損を伴う拜法ということでは、塗炭齋などの道教儀禮が起想される。道教の「自搏」と佛教の「自撲」の關係について、はじめて注目して論文を著したのは楊聯陞教授であり、二つの行法は思想的にも形式的にも關連した苦行法で、自撲は自搏の影響を受けてできあがつたとした⁽³⁾。

胡適博士は、佛教の「自撲」は「自己が匍伏」すること、泥面に頬を打つ苦行法ではなく、楊教授の引く道教の「自搏」の用例は同義に解釋できないと論評を加えた。こ

れに對して楊教授は、あらためて論を展開した。⁽⁴⁾ 吉岡義豐博士は、新たに六朝時代譯出の九種の佛教經典と、道教經典の用例を新資料として楊説を批判した。⁽⁵⁾ これらの研究に觸發され、成瀬隆純氏は、唐代の淨土教祖師たちの「自撲懺悔」受容の解明を試み、從來の淨土教研究の方向を大きく轉換させる問題提起をおこなった。⁽⁶⁾

上述の研究により、道佛二教の懺悔のための拜禮法について、かなり解明された。ただ、論點の一つである「如太山崩」として記述される拜法が、如何なるものか明確でない。つまり、普通の五體投地と異なる拜法がどの様な背景で成立したのか、また何故に泰山の崩壊にたとえるのか、という疑問が解決されていない。本稿は、「五體投地、如太山崩」に注目して、拜禮の中國的發展の側面を明らかにしたいと考える。

二 五體投地と自撲

五體投地はもともとインドで最上の敬禮法であり、五輪投地、五輪著地あるいは擧身投地ともいわれた。五體（兩

膝・兩肘・頭頂）を地に着ける致敬の作法で、『大智度論』卷一〇〇に「禮に三種あり、一は口禮、二は膝を屈して頭地に至らず、三は頭地に至る、これ上禮となす。」（『大正藏』卷二五、七五一a）とある最上の敬禮に當たる。また、唐・玄奘の『大唐西域記』卷二には、

致敬之式、其儀九等。一發言慰問、二俯首示敬、三擧手高揖、四合掌平拱、五屈膝、六長踞、七手膝踞地、八五輪俱屈、九五體投地。（『大正藏』卷五一、八七七c）

と九種の敬禮法をあげ、五體投地を最も鄭重な致禮の方法として述べる。五體投地を行う時に觀想する作法については、『離垢慧菩薩所問禮佛法經』に記述され、佛足禮⁽⁷⁾であったことがわかる。「初めに右膝を、次に左膝を、續いて右肘と左肘とを地に着け、二掌を舒べて額を過ぎ、空を承けて佛足に接するように觀念し、最後に頭を地に着ける⁽⁸⁾」という方法であった。激しく體や頭を地に打ちつけるということではなかった。

さらに、支謙によって、三世紀中頃に譯出された『梵摩渝經』には、

即興正五體投地。三頓首曰、歸佛歸法歸命聖衆。

〔大正藏〕卷一、八八四c)

と五體投地の後、三寶に對して「頓首」して歸依を誓うという記述がある。

頓首は、『周禮』春官、大祝に

辨九拜、稽首、頓首、空首、振動、吉拜、凶拜、奇拜、褒拜、肅拜。

ある九種の拜禮法の一つである。鄭玄の注によれば、頓首は「頓首、拜首叩地也。」とある。この拜禮は、頭額で地を叩くことであつたことがわかる。跪座してから大地に頭を打ち付ける方法は、時代によって少しづつ違いがあつた。⁽⁹⁾ここでは、五體投地とは別の所作として記述される。

五體投地の拜法自身には、自己の肉體を苛むという意味はなかつた。道宣の『釋門歸敬儀』卷下に、

亦云五體投地者、地持亦云當五輪著地而作禮也。阿含云、二肘二膝并頂名爲五輪、輪爲圓相、五處皆圓。今有梵僧禮拜者、多褻衣露膝、先下至地然後肘按地、兩掌承空示有接足之相。〔大正藏〕卷四五、八六三b)

〈五體投地・如太山崩〉考

とあり、佛教者が本來の五體投地の意味を充分理解してゐたことがわかる。

従前の研究で、自撰と五體投地を結び付ける資料として、隋・費長房が開皇十七年(五九七)に撰集した一切經目錄の『歷代三寶紀』があげられる。卷二一の『占察經』の解説には、

占察經二卷。

右一部二卷、檢群錄無目、而經首題云、菩提登在外國譯、似近代出妄注。今諸藏內並寫流傳。而廣州有一僧行塔懺法、以皮作二枚帖子、一書善字、一書惡字、令人擲之、得善者好、得惡者不好。又行自撰法以滅罪、而男女合雜。青州亦一有居士、同行此法。開皇十三年、有人告廣州官司云、其是妖。官司推問、其人引證云、塔懺法依占察經、自撰法依諸經中五體投地如太山崩。⁽¹⁰⁾〔傍線は論者による、以下同じ、大正藏〕卷四九、一〇六c)とあり、他書にも同じ内容の記述がみられる。廣州の僧が『占察經』による塔懺法なる占術と、男女が合雜して行う自撰法を修し、また青州でも同じ行法が、ある居士によつ

で行われ、これらが邪教視され官憲により調査された事件は、開皇十三年（五九三）に發覺した。これは『歷代三寶紀』の編纂の數年前であり、記述はかなり信頼がおける。

『占察經』（大正藏）卷一七に收められる『占察善惡業報經』（相當）は、地藏信仰を核に「木輪相」なる占法について説いているが、中國撰述の疑偽經典である。この事件により、塔懺法は禁止されたが、それ以降も中國淨土教では取り入れられた⁽¹²⁾。この經の本文には、自撲や五體投地については觸れられていない。『歷代三寶紀』記載の占術も、この經の木輪相とはだいぶ異なる。さて、『歷代三寶紀』記載の官吏への返答は、「塔懺法は『占察經』により、自撲法は諸經中の五體投地如太山崩による。」ということである。自撲は單なる五體投地ではなく「太山崩れるが如き」五體投地である、と回答者はいつている。普通の五體投地とは別に、如太山崩と形容される行法があり、それが一般的に知られていた方法であったということになる。

三 史料にみる太山崩

次章で述べるように、偽經ではない初期の漢譯經典（『佛所行讚』）には、佛足禮を山の粉碎に喩えた例がみられる。インドに既に山崩れに形容される拜法はあったと思われるが、この拜禮は懺悔と結びつくものではない。廻れる限りの原典と比較してみても、太山という固有名詞に直接對應する言葉は見いだせない。いったい何故に太山に喩えられるのか。大きな山が崩れることを太山にあてて中國的表现としたのであろうが、これは現實にある山東省の泰山とそのイメージを想定しているのであろうか。

泰山は、奇岩と奇松と急流とに富み、巍々巖々とした山容を誇る名山であるばかりか、『易經』の「地天泰」の卦に説くように「天地交わりて萬物通ずる」所であった。中國の統一者の天子が「封禪」の祭りを行う場所であり、また神仙説や不老長生思想とも深い關係をもつ山であった。更に、「泰山府君」や「泰山地獄」のような死者のむおおく所だという信仰もあった⁽¹³⁾。

孔子が自分の死期をさとして言ったと伝えられる「泰山其顛乎、梁木其壞乎、哲人其萎乎」(『禮記』檀弓上)をはじめ、多くの成句が示すように、一般的には崩れないものの象徴であった。また、緯書の一つである『洛書摘六辟』には、「太白守心、太山崩、後九年大飢」という佚文が残される⁽¹⁴⁾。太山が崩れることは、九年間も飢饉みまわれる災異の徴として記述される。

観念的には不動・不壊であっても、現實にはどうであったのか。歴史書を檢索してみると、數例の泰山の崩壞の記述が見いだせる。『晉書』卷二九、五行下には、

四年七月、泰山崩墜三里。京房易傳曰、「自上下者爲崩、厥應泰山之石顛而下、聖王受命人君虜」、及帝晏駕、而祿去王室、惠皇懦弱、懷・愍二帝俱辱虜庭、淪胥於北、元帝中興於南、此其應也。

とある。この泰始四年(二六八)七月の地震による泰山崩壞の記録は、『宋書』卷三四、五行五にも記述される。

この時期、太行山も崩れたようで、兩書とも「魏元帝咸熙二年(二六五)二月、太行山崩、此魏亡之徴也。其冬、

晉有天下。」や、「武帝泰始三年(二五七)三月戊午、大石(『宋書』では太行山)山崩。」と記述する。群發地震の一つのために泰山は崩れた。

それより約二百五十年後、またもや地震による崩壞は繰り返された。『魏書』卷一一二上、靈徵志上によれば、景明元年(五〇〇)の太陰山、同四年(五〇三)と正始元年(五〇四)の恆山の崩壞に續き、永平四年(五一二)から太行山脈沿いには群發地震が發生し⁽¹⁵⁾、延昌三年(五一四)には、

延昌三年八月辛巳、兗州上言、「泰山崩、頽石湧泉十七處。」泰山、帝王告成封禪之所也、而山崩泉湧、陽黜而陰盛、岱又齊地也。天意若曰、受禪讓者。齊代魏之徴也。

と泰山の崩壞の記事を載せる⁽¹⁶⁾。

観念的には崩壞すべきでない山の泰山であっても、現實の地震では崩れることがあった。しかも當時の人々は、これを自然現象としてではなく、天のくだす災異と感じていた。しかも、うち續く群發地震と相俟って、人間や農作物の損害もかなり甚大であった。人々は恐怖を懷くととも

に、厭世的感情や、現状の改變を希求する願望を持ったことは想像に難くない。天地崩壊の前兆という、ある種のこの世の終末を豫感したのではないか。

泰山が崩れば、冥界との出入口も壊れることになり、忌むべき者どもが現世へ流入してくるという信仰もあつたようである。敦煌出土の非常に短い經典の『勸善經』に、

爲太山崩、要女人萬萬衆、須片萬萬願、著病者難差

〔大正藏〕卷八五、一四六二a)

という語を見出すことができる。この經の敦煌經は三十點近くにのぼり、實際は一種の厄除けの護符であつたといわれ、ペリオ本には貞元十九年(八〇三)の日付が記される。⁽¹⁷⁾護符という性格上、「太山崩」のここでの意味は分かり難い。

また、同様な信仰基盤をもつと思われる、『佛圖彙所化經』という偽經がある。この經も、疫病除けの護符として民間に用いられた。佐藤智水氏の譯によれば、「和平四年(四六三)に九節の杖を持った佛圖彙という老人が、「泰山の東門が崩れたため、泰山では(泰山の神が)鬼卒千九萬人

(?)に赤い棒と赤い繩を持たせてこの世に遣わし、この世の九萬男女三十萬人(?)を捕まえて、東門の修復工事にこき使おうとしておるし、また十千九萬人の女たちには(鬼たちの)袍襖のを縋わせようともくろんでおる。だからこの世ではこれから毒腫の病が流行するであろう。この病氣は罹ると十人のうち九人は死ぬという疫病で、(家柄などに關係なく)どんな家にもふりかかってくるぞ。」と告げ、その難から逃れる方法を教える。⁽¹⁸⁾という内容である。

この解釋から『勸善經』の文を考えれば、やはり泰山にある冥界の出入口の毀損により、多くの人間や家畜が疫病におかされることを意味していると理解できる。地震による山崩れの災害は、衛生狀態の惡化を招き、疫病の蔓延の原因にもなった、という現實の狀況を踏まえた民間信仰が流布していたことがわかる。

四 如太山崩について

前章で史書に記録された泰山崩れと、それを背景にしたと思われる民間に流布した偽經を取り上げたが、これだけ

では「如太山崩」を完全には明確にできない。以下に、「如太山崩」と形容される行爲を文獻から拾い上げたい。

〈投身佛足禮〉

紀元一世紀頃のインドの佛教詩人の馬鳴が作った佛陀生涯の宮廷敍事詩を、曇無讖が玄始三十五年（四一四～四二六）に譯した『佛所行讚』卷四には、「醉象がシャカ・ムニを襲おうとしたが、その威嚴によって酔いを醒ましひれ伏した。」という記述が、

醉象奮狂怒、見佛心則醒、投身禮佛足、猶如太山崩。

（『大正藏』卷四、四一a）

と書かれる。この部分に相當するであろう『ブッダチャリタ』には、

かくてかの憤怒せる象は近づいてきたが、牟尼の威力によって正氣に歸り、青黒い山が雷電によって粉碎されたように、體は頽れ頭は垂れた。

（講談社『原始佛典』卷一〇、二四四頁、第二章五二偈）

とあり、「青黒い山」が「太山」と漢譯された。象が巨體を大地に崩ずし、頭を着地する禮拜をあらわしている。

〈五體投地・如太山崩〉考

〈自殺（于）地〉

梁の武帝の命により僧晏等が作成したものを、更に寶唱等が編纂し、梁・天監十五年（五一六）に出來上がった、經律等に散見する異相の蒐録である『經律異相』卷一六には、『護口經』を引いて、

是時餓鬼、說此語已、舉聲啼哭、自投于地、如太山崩、天翻地覆、……（『大正藏』卷五三、八七a）

とある。この記載は、願足阿羅漢が餓鬼を教化し、餓鬼が敬禮する姿を記述するものであるが、前後の「舉聲啼哭」や「天翻地覆」の語からも解るように、物靜かな禮拜ではない。⁽¹⁹⁾

『經律異相』より以前、三世紀後半に竺法護が譯し、承遠が整文した『超日明三昧經』卷下には、

有一太子最後得策、窮久下第乃得作佛、則時愁惑不能自勝、便自投身、如太山崩、吾身云何最後作成。佛告

之曰、勿得憂惑、道無有限亦無遠近、能分別解空之慧、便在前耳。（『大正藏』卷一五、五四三c）

とある。五輪はどの様に接地したか解らないが、大地に倒

れ込む禮拜が「如太山崩」と形容されていたことがわかる。

また、太平眞君六年（四四五）に慧（德）・曇（覺）によつて譯された『賢愚經』卷一、梵天請法六事品第一には、

時王報曰、汝等諸人、慎勿却我無上道心、吾以是事誓求作佛、後成佛時、必先度汝、是時衆人、見王意正、

啼哭懊惱、自投於地、王意不改、語婆羅門、今可剷身

而燃千燈、各著脂炷、衆會見已、絕而復蘇、以身投

地、如太山崩、⁽²⁰⁾『大正藏』卷四、三四九c

とある。

これらの文章は、當然レトリックとして強調されている面はあろうが、譯出當時の佛教徒の儀禮が反映されていると考えられる。

〈舉身自撲〉

五世紀以前には譯され、後に中國人の好む孝子譚なり、

二十四孝の一人にまで加えられた睽子の本生を説く『佛說菩薩睽子經』では、

我罪惡無狀、入山射獵、見水邊有群鹿、引弓射之、箭

誤中道人子、睽身被毒箭甚痛、故來語二道人、父母聞之、舉身自撲、如太山崩、地爲震動、

『大正藏』卷三、四三七c

とある。睽子は、父母の眼病を治すため鹿衣を着て山に入り、鹿乳を採ろうとして誤って射殺された。その死を知つて、嘆き悲しむ父母は「身を舉げて自撲すること、太山崩れるが如し」であつたと記載される。近親の死に對する激情の行爲として記されている。⁽²¹⁾

上記は、悲嘆の極みを表した自撲であるが、自撲と懺悔を結び付けた記載では、唐・善導が七世紀中頃に著した『觀念法門』に、

入塔於佛像前自撲懺悔、如太山崩、婉轉於地、號哭向佛、日夜相續、至死爲期。

『大正藏』卷四七、二九ab

とある。

〈躄地〉

唐・道世によつて、總章元年（六六八）に撰された『法苑珠林』卷八十に、

時諸禽獸皆隨太子還至兩兒戲處號呼自撲。……妃聞感激覺地而倒、如太山崩、宛轉啼哭而不可止。

〔大正藏〕卷五三、八八一b)

と、自撲とともに太山崩るるが如き「覺地」という行爲が書かれる。

また、同様な行爲は、『舊雜譬喻經』卷下に、

摩訶目犍連、聞說是事、身即覺地、如太山崩、舉聲大哭、我憶知佛、有是功德、今方如此。

〔大正藏〕卷四、五一九c)

とある。この經は、『開元錄』によれば康僧會により太玄元年(二五一)に譯されたとあるが、この譯出年代は疑問がある。⁽²²⁾

いづれにしても、覺地は「地にたおれる」という意味で、過激な行爲をともなっていたことが窺える。⁽²³⁾

〈五體投地〉

佛陀跋陀羅により、東晉の隆安二年(永初二年(三六八(四二二))に譯出され、佛を觀じ、佛を念じるには如何にすべきかについて説く『觀佛三昧海經』には、以下のよ

うな記載がある。

①卷二

誰有智者、多諸方便、能救我命、設命全濟、於彼人所、無所悋惜、作是思惟已、如太山崩、五體投地、號泣雨淚、合掌向佛、讚歎如來種種德行、作是讚已、誦懺悔法。

〔大正藏〕卷一五、六五五b)

②卷三

今佛現世沙門大衆一切雲集、汝當向諸大衆衆僧、發露悔過、隨順佛語、懺悔諸罪、佛法衆中、五體投地、如太山崩、向佛懺悔、心眼得開。

(六六〇c)

③卷三

比丘見已、讚歎佛言、世尊甚奇特、但於胸字、說無量義、何況佛心所有功德、說是語已、向佛懺悔、五體投地、如太山崩、悲號雨泣、對佛啼哭。

(六六一b)

④卷九

如來在世光明色身、與此何異、佛大人相、願除我罪、作是語已、如大山崩、五體投地、懺悔諸罪、觀佛眉間、懺悔因緣。

(六八九a)

この記述は、佛に向かつて自らの罪過の許しを請う懺悔の方法として、「五體投地、如太山崩」を説いている。

また、『出三藏記集』によれば、曇摩蜜多が元嘉十八年(四四一)に譯出した『禪祕要法經』卷中には、

是時會中有一比丘、名禪難提、於深禪定、久已通達、
…若復有人殺生邪見、欲修正念、當云何滅邪見殺生惡
煩惱障、作是語已、如大山崩、五體投地、頂禮佛足。

〔大正藏〕卷一五、一二五五a)

とあり、それを引く唐の法照撰の『淨土五會念佛誦經觀行儀』卷下には、

又禪祕要經說、……欲懺悔者、當云何除滅是罪、說此
語已、太山崩、五體投地、頂禮佛足。

〔大正藏〕卷八五、一二五五a)

とある。この記述も懺悔の行爲として五體投地である。

善導の『觀念法門』には、

如是諸人、若能懺悔、日夜六時、身心不息、五體投
地、如太山崩、號泣雨淚。

〔大正藏〕卷四七、二九b)

とあり、その弟子の懷感が淨土教義の疑問點について、問答體で答えた著作の『釋淨土群疑論』卷七には、

問曰、經言五體投地、求哀懺悔。未知懺悔之徒、或多
自撲、未知有何聖教。若五體投地即爲自撲法者、將恐
此釋理未可。然此五體言、何妨只是五輪着地、頭面禮
佛也。

釋曰、如觀佛三昧海經第三說、……如是觀佛色身、所
見不同、不得見佛眞金色身。發露懺悔、懺悔諸罪、五
體投地、如太山崩、自拔頭髮、舉身投地、婉轉自撲、
鼻中出血。懺罪消滅、心眼得開、見佛身、端嚴微妙、
如須彌山、光顯大海。此豈不是懺悔經文自撲之法。

〔大正藏〕卷四七、七六c)

とある。前述の成瀬氏論文によれば、善導や懷感などの唐
代の淨土教者の著述にこれらが見えるのは、日常の生活に
追われる民衆にとつても、修し易く實感をともなうため、
懺悔の方法として淨土教徒に實踐されていたを示すという
が、庶民が實際に行うにしては、かなり激烈な方法であ
る。

また、如太山崩の五體投地は、『慈悲道場懺法』にもしばしば記述され、卷一に「相與人等一痛切、五體投地如大山崩。」(『大正藏』卷四五、九二五a)とあり、卷三に「必須五體投地如大山崩。此云不惜身命、爲滅罪因緣故、殷勤奮勵。」(九三三a)とある。しかし、これらは他に「五體投地稽顙求哀」(九三四b)や「五體投地慚愧懺悔」(九三七c)とあるのと同様に、懺悔の定形句として用いられている。

〈擧身投地〉

五體投地と同じ意味をもつ擧身投地は、後漢の失譯經典の『大方便佛報恩經』卷二に、

時諸夫人聞王語已、默然不對、心悲喚噓、擧聲大哭、自拔頭髮、抓擗面目、……時諸太子、聞是語已、擧聲⁽²⁶⁾吼喚、驚動神祇、擧身投地、如太山崩。(一二四a)とある。

また、最も注目すべき資料は、隋唐代の意識を反映しているといわれ、大曆十二年(七七七)に明曠によって刪補された『天臺菩薩戒疏』卷上に、

然懺悔法、有其三品、上品懺者、擧身投地、如大山崩、

〈五體投地・如太山崩〉考

毛孔流血、中品懺者、自露所犯、悲泣流淚、下品懺者、隨師口言、陳前罪咎。

(『大正藏』卷四〇、五八二b)

とある。懺悔の中で最上なのは、「擧身投地・太山崩れるか如くし、毛孔から血が流れる」ような方法とする。

〈道經の如太山崩〉

道教では、古くから神々への贖罪の概念を含む懺悔行爲として、大地に身體をひれ伏し頭を着け、あるいは打ちつける儀禮は存在した。如泰山崩と形容されるのは、『太上洞玄靈寶業報因緣經』(HY. 336)卷三(九紙)には、

今日道場大衆、各發至誠、於我御前、發露懺悔、即得高眞垂憫、衆聖哀憐、汝等九祖以來、無量罪業、五體投地、如泰山崩、拜諸上聖、萬罪消滅、

とある。先祖からの罪業を消滅するための懺悔の方法として、五體投地・如泰山崩をあげる。この行爲は、佛教の模倣として起こってきたものであろう。

更に、『太上天道玉清經』(HY. 1301)の「自撲」に関する記述では、卷七(一四紙)に、

爾時諸戎、重靚浮雲之上、大悲天尊、威儀侍從、大驚恐、自拔頭髮、悔過責己、刀劈其準、遍體流血、踊身自撲、猶如山崩、觀此希有、求欲捨眼、燒身破骨、以爲供養、

とあり、卷一〇（二九紙）に、

爾時天尊、說此經已、五百外道、柯葉惟等、悉捨邪法、肉袒求哀、從道出家、欲求濟度、悔過自責、遍體血流、拔除鬢髮、如鳥鰓翻、踊身自撲、猶如山崩、とある。これらは外道の所作として語られているが、流血しながらの激しい懺悔の姿を「猶如山崩」とするのは、「如太山崩」と同じ行爲と解してよいであろう。ここでの外道は、佛教を指すと思われる。⁽²⁷⁾

五 流血する拜法

山が崩れるような五體投地がインドにあったとしても、それは自虐的行爲による懺悔の行爲ではなかった。しかし、如太山崩と形容される行爲は、五輪がどう地に觸れるかに關係なく、歡喜や悲嘆、或いは懺悔の爲に自己を大地

に擲ったことがわかる。しかも、穩やかな敬禮の拜法ではなく、自虐的行爲であった。聲をあげて泣いたり、あるいは髪を抜き地を轉げまわる行爲は、投地の際に同時に行われた。資料の譯出や成立の時期から考えれば、早い時期からいきなり流血をとまうような過激な拜禮として記述されていたわけではない。佛に對する歡喜や、死に對する悲嘆の極まった感情を、一氣に大地にひれ伏す行爲で示している。それが、懺悔の意味で記述されるようになるのは、五世紀以降になるのではなからうか。しかし、この時代のこの種の行爲だけが突然に登場してくるわけではなく、それ以前にあった行爲が展開して成立したと考えられる。

懺悔は、『四分律比丘戒本』に「若自知有犯者、卽應自懺悔」(『大正藏』卷二二、四七七c)とあるように、犯戒に對し過非を悔い改め、再犯をしないこと表明することにあつた。⁽²⁸⁾ それには必ずしも肉體的苦痛は必要ない。自虐性を備えた懺悔が中國社會に受け入れられたのは、從來の習俗に類似する行爲があつたからであらう。

懺悔の苦行法を受け入れる素地として、中國固有の傳統

的禮法を想定できないであらうか。體を大地に投げ出す動作で、頭額を強くぶつければ當然血は流れる。これは、頓首の姿である。頓首は、まず跪いて手を拱して、胸の前に兩手を重ね合わせたまま頭を下ろし、頭額を以て急激に地を叩く拜法である。この原型は、頭額を物に激突させて自殺する、という中國に特異な習俗による。この拜はもとものと凶禮に用いられ、近親や主長の死にあたって、哭泣悲哀して頭額を地上に叩撃し殉死を圖るという動作を象徴している。自らの死を以て罪を請い、哀訴嘆願するのにも用いられた。頓首の語は後に死罪の語と合わせて、上奏文の末尾に畏敬を表す常套句ともなったが、身を殺すという意味あいはその中にもある。⁽²⁹⁾ 頓首(額、或いは稽顙ともいう)は、後漢時代以降は叩頭とも稱され長く存続した。また、叩頭により流血する事例は、『史記』卷一二六、滑稽列傳の西門豹傳の「叩頭して且つ破り、額血は地に流れ、色は死灰の如し」とある様に、史書の中にはしばしば現れる。⁽³⁰⁾ 道教では、叩頭が宗教的拜禮で多く用いられていた。いくつか例を示せば以下のようになる。『太平經』〈HY. 1093〉では、卷一一一に「叩頭自搏而啼鳴、……」、卷一四に「迎醫解除、常垂涕而言、謝過於天、自搏求哀、叩頭於地、不避瓦石泥塗之中、輒得令父母平安、」などの記載がある。また、『洞玄靈寶長夜之府九幽玉匱明真科』〈HY. 1400〉には十方に對する拜禮が、

東九拜言、……畢脫巾叩頭自搏、各八十一過止。
(二七〜二八紙)

次南向三拜言、……畢叩頭搏頰、各二十七過止。
(二八〜二九紙)

次西向七拜言、……畢叩頭自搏、各六十三過止。
(二九紙)

次北向五拜言、……畢叩頭搏頰、各四十五過止。
(二九〜三〇紙)

次東北向一拜言、……畢叩頭搏頰、各九過止。
(三〇紙)

次向東南一拜言、……畢叩頭搏頰、各九過止。
(三二紙)

次向西南一拜言、……畢叩頭搏頰、各九過止。

(二〇—二紙)

次向西北一拜言、……畢叩頭搏頰、各九過止。

(二三紙)

次向上方三十一拜言、……畢叩頭自搏、各二百八十八過止。

(二二—二三紙)

次向下方一十二拜言、……畢叩頭自搏、各一百二十過止。

(二二—二四紙)

と記される。各方向に向かい歸命を誓う言葉言い終わつた後に、「叩頭自搏」したり「叩頭搏頰」したりすること
が記される。『老君音誦誡經』〈HY. 784〉にも、

辰巳之日、天清明、夜半北向悔過、向天地叩頭百下、
三十六搏頰、三過三百下、以爲常、

と書かれる。各方向への懺悔については、陸修靜の『洞玄
靈寶五感文』〈HY. 1268〉の塗炭齋についての記述に、

三元塗炭齋、……法於露地立壇、安欄格、齋人皆結同
氣賢者、悉以黃土泥額、被髮繫著欄格、反手自搏、口
中銜璧、覆臥於地、開兩脚相去三尺、叩頭懺謝、……
とある。

その他、『眞誥』〈HY. 1010〉の卷一四に「陸聞之、於是
心開意悟、因叩頭自搏。」(十一紙)や、卷五に「乃叩頭流
血、涕淚交連、悲喜自搏、就之請道。」(六紙)とあり、後
者は叩頭による流血をともなった記載である。叩頭が單獨
でも宗教的禮拜であつたことは、同書卷五に「叔期知是神
人、因拜叩頭、就請要訣。」(十紙)、「朝朝朝拜、叩頭求乞
長生。」(七紙)、卷一八に「仍向室拜叩頭訖。」(一四紙)、卷
一〇に「併手叩頰」(九紙)とあることから理解できる。

六 ま と め

身體を痛めつけながら祈り、罪を告白することは、絶對
者の赦しを期待してのことである。前述の『梵摩渝經』の
五體投地の後、三寶に對して「頓首」して歸依を誓うとい
う記述は、五體投地が傳統的禮拜法と習合していく過程を
示している。拜法は時代とともにより自虐性を強め、頭額
の着地以外の行爲もともなうこととなる。大地を轉げまわ
ったり、髪を引き抜く行爲をも含む過激な行爲へと展開し
ていった。

常ならざる行爲を示し、自らの身體を象徴的な供儀として祈る姿は、『呂氏春秋』順民の「是において其の髪を翦り、其の手を彫して、身を以て犠牲と爲し」と、殷の湯王が旱魃に際して天に祈禱した故事にもあらわされる⁽³¹⁾。髪の毛をザンバラにしたり、毀損することの解釋は多岐にわたる⁽³²⁾。上記の故事は、罪人の姿をとり、贖罪をする祈願と考えてよからう。

頓首や叩頭といった在來の禮法が、佛教や道教の拜法の受け皿となった。贖罪を表す激しく體を打ちつける行爲が、道佛双方の懺悔儀禮に組み入れられた。その意味からすれば、自撲や五體投地・如太山法は、「叩頭・自搏」の自搏からではなく、叩頭から發展したものであるという一面を持つといえる。

一方、歴史上の災害や、それを背景にした信仰にも目を向けるべきであろう。『勸善經』や『佛圖堂所化經』の記述を、如太山崩の拜禮の解釋に直接は用いることは出来ないが、泰山が冥界信仰の中心であったことを除いては、『太山』に喩えられるべき根據が見いだせない。天地崩壞

の様相を身體で表し、現世以外へも自己の願いや懺悔を伝えることを、「太山」という語が示していると考えられる。

註

(1) 大が强者に服従の意を表すとき、腹を上に向け叛意のないことを示すように、靈長類はうつ伏せた状態で恭敬の感情を相手に伝えるそうである。その意味からすれば、腹這いになって相手に禮拜するのは、人類に共通する最上の挨拶の方法で、五體投地もその中の一つといえよう。

(2) 特異な例としては、奈良・東大寺の二月堂修二會の十一面觀音悔過で行われる五體投地は、「五體板」という板に参加の僧侶が膝を激しく打ちつけ、大きな音を出す方法がある。(吉田一彦『日本古代社會と佛教』吉川弘文館、平成七年、二二二～二二七頁参照。)

(3) 楊 聯陞『道教之自搏與佛教之自撲』(塚本博士頌壽記念『佛教史論集』昭和三十六年)参照。

(4) 楊 聯陞『道教之自搏與佛教之自撲補論』(中央研究院歷史語言研究所集刊第三十四、一九六二年、論中に胡適の論評を載せる)参照。

(5) 吉岡義豊『自搏と自撲について——楊聯陞教授の論說によせて——』(佐藤博士古稀記念『佛教思想論叢』昭和四十七年、『吉岡義豊著作集』卷二に再録、本稿は後者によった)参照。

(6) 成瀬隆純『中國淨土教と自撲懺悔』(『フィロソフィア』第

七十一號、早稻田大學哲學會、昭和五十八年) 參照。

- (7) 五體投地が佛足禮であることは、普禮の眞言「オン サラ バ タタギヤタ ハナ マンナノウ キヤロミ on sara tatagapadavandanam karomi」が、「我は一切如來のみ足に頂禮す」という意味であることから証明できる。高橋尙夫「悉曇」(『宗學研修會紀要』創刊號、眞言宗叢山派、平成六年) 參照。

- (8) 願我右膝著地之時、令諸衆生正覺道。願我左膝著地之時、令諸衆生於外道不起邪見。悉得安立正覺道中。願我右手著地之時、猶如世尊坐金剛座、右手指地震動現瑞、證大菩提、今我亦爾、共諸衆生同證覺道。願我左手著地之時、令諸外道難調伏者、以四攝法而攝取之、令入正法。願我首頂著地之時、令諸衆生離憍慢心、悉得成就無見頂相。(『大正藏』卷一四、六九九a)

- (9) 藤野岩友「周禮九拜考」、「頓首考」(『中國の文學と禮俗』角川書店、昭和五十一年) 參照。

- (10) 『歷代三寶記』自身は、經錄として問題點がないわけではない(林屋友次郎『經錄研究』參照)が、後の資料「續高僧傳」卷二・達摩笈多傳(『大正藏』卷五〇、四三三c)、『大唐內典錄』卷五(『大正藏』卷五五、二七九b)、および『開元釋教錄』卷七(『大正藏』卷五五、五五一a)に「占察經」とこの事件についての同様な記述がある。

- (11) 牧田諦亮「疑經研究」(臨川書店・復刻、平成元年) 一〇

八〇一六頁參照。

- (12) 成瀬論文、九七〇九頁參照。

- (13) 酒井忠夫「太山信仰の研究」(『史潮』第七卷二號、昭和十二年)、福永光司「道教思想史研究」(岩波書店、平成元年)、澤田瑞穂「中國の泰山」(講談社、昭和五十七年) 參照。

- (14) 安居香山・中村璋八編「重修緯書集成」卷六(明德出版社、昭和五十三年) 一八六頁。

- (15) 佐藤智水「北魏末の大衆の亂と災害」(『岡山大學文學部紀要』第一四號、平成二年) 一三四一三六頁參照。

- (16) 「泰山崩」についての史書の記錄は、この他にも『明史』卷三〇、五行三と、卷二六七、列傳一五〇にみえる。

- (17) 牧田本、七七頁參照。『大正藏』はスタイン本(S. 47)に依っているが、牧田本はベリオ本(P. 260)に依っている。牧田本は「須牛萬萬頭」にする。また、小笠原宣秀「敦煌本勸善經をめぐる」(『東方宗教』第二號、昭和三十八年) 參照。

- (18) 佐藤論文、一三五頁から抜粹。

- (19) この様な歡喜に満ちて拜禮する姿は、『經律異相』卷二四「阿育王經」を引いて、「時賓頭盧、與無數阿羅漢隨從圍遶、從空中下坐第一座、闍衆皆起、見賓頭盧、頭髮皓白、額皮眉毛、悉合覆面、如緣覺身、五體投地、禮賓頭盧、舌抵其足、啼泣說偈讚歎、賓頭盧以兩手舉眉毛、……」(『大正藏』卷五三、一三六a)と述べられる例もある。これは、阿育王がビ

ンズル尊者を拜禮する姿であり、「五體投地」の語はあるが、「如太山崩」の語はない。

- (20) この部分に相當する他の異譯資料の『菩薩本行經』上(『大正藏』卷三、一一三b)には、該當する語句はない。

- (21) この經の他の二本の異譯『佛說鬘子經』でも、ほぼ同じ語句「父母聞之舉身自撲、如太山崩、地爲大動」(『大正藏』卷三、四四一bと四四三a~b)と記述される。しかし、『南傳大藏經』卷三八、小部經典一六、および「サーマ前生物語」(春秋社『ジャータカ全集』卷九、「六度集經」卷五「大正藏」卷三、一二四b)、『雜寶藏經』卷一(『大正藏』卷四、四四八b)、『善見律毘婆沙』卷六(『大正藏』卷二四、七三三b)、『大唐西域記』卷二(『大正藏』卷五一、八八一b)には該當文は無い。

- (22) 吉岡論文、一二〇頁參照。吉岡博士は、『經律異相』に引かれる同經の文との關係から、五世紀には通行していたと論じた。

- (23) 『觀佛三昧海經』卷三には、「然我罪咎、但聞佛聲不見佛形、每見佛時、如墨象脚、何酷之甚、說是語已、舉手推胸、號泣墮地、是時如來、以梵音聲、猶如慈父安慰其子……優婆夷衆中、見佛色身、猶如聚墨者、即從坐起、合掌向佛、兩淚號哭、悲不能言、舉手拍頭、氣絕墮地、是時世尊、見是事已、以梵音聲、安慰諸女。」(『大正藏』卷一五、六六二a~b)とあり、『大方便佛報恩經』卷二には、「無常卒至、老病

喪亡、家室男女、愁毒懊惱、舉聲大哭、以手墮胸、或時拔髮、食飲灰土、悶絕墮地、持幡乘車、啼哭送之。」(『大正藏』卷三、一三二a)とある。

- (24) 吉岡論文、一一九頁參照。

- (25) 成瀬論文、九九頁參照。

- (26) また、『大方便佛報恩經』卷五には「王言、有婆羅門、從遠方來、欲乞我頭、我已許之、夫人太子聞語已、舉身投地、舉聲大哭、自拔頭髮、裂壞衣裳、而作是言、大王、天下所重、莫若己身、云何今日、難捨能捨、持用施人。」(『大正藏』卷三、一五〇a)と、舉身投地についての記述がある。

- (27) 山田俊『太上大道玉清經』の成立について(『東方宗教』第八八號、平成八年)參照。

- (28) 山田利明「道教における齋法の成立」(『アジアにおける宗教と文化』東洋大學東洋學研究所編、平成六年)三三三頁參照。

- (29) 藤野論文、三四七頁參照。

- (30) 藤野論文、三五八頁參照。藤野博士は、この他に「頭を露はし肉袒し、頓頭(頓首)して血を流す」(『風俗通』十反)、「叩頭して血を流し、枉狀を訴言す」(『後漢書』卷五八、虞詡傳)、「叩頭して血を流し、言涕と並にす」(『吳志』卷六三、吳範傳)、「恐懼して頓首して血を流す」(『舊唐書』卷八四、裴行儉傳)、「叩頭血を流して、然る後に免かることを得たり」(『北史』卷一四、后妃傳下)の用例を示される。

- (31) 土屋昌明「後漢における思過と首過について」、『道教文化への展望』平河出版社、一九九四年、二八〇頁参照。
- (32) 大形徹「被髮考」、『東方宗教』第八六號、平成七年）参照。

〈付記〉 史書の検索については、二階堂善弘氏（早稻田大學大學院）の協力で、インターネットを使い臺灣・中央研究院から情報を得た。

執筆者紹介

滝本 裕造 京都市立藝術大學教授

劉 紅 武漢音樂學院專任講師

龜田 一邦 鎮西敬愛高校教諭

湯淺 邦弘 大阪大學助教授

田中 文雄 大正大學非常勤講師

蜂屋 邦夫 東京大學教授

山田 利明 東洋大學教授

小林 正美 早稻田大學教授